

平成28年度第2回宇治市小中一貫教育推進協議会会議録

会議名	平成28年度第2回宇治市小中一貫教育推進協議会
日時	平成29年3月14日（火） 18時00分～20時00分
場所	宇治市役所 6階 602会議室
出席者	<p>（委員） 榊原会長 萩副会長 船川委員 中本委員 内田委員 松井委員（欠席） 石田委員 井戸委員 天花寺委員</p> <p>（報告者） 植木（木幡中学校） 吉野（宇治小学校）</p> <p>（事務局） 石田教育長 澤畑教育部長 伊賀教育部副部長 藤原参事 瀬野センター長 富治林教育支援課長 金久一貫教育課長 縄手教育総務課長 市橋一貫教育課副課長 辻一貫教育課総括指導主事 姫野一貫教育課指導主事 大越一貫教育課学校教育指導主事 河野一貫教育課学校教育指導主事</p>
配付資料	<p>○平成28年度第2回宇治市小中一貫教育推進協議会資料</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成28年度宇治市小中一貫教育中学校ブロック活動状況 ・平成28年度中学校ブロック年度総括表 ・平成28年度宇治市小中一貫教育推進協議会の活動報告 ・平成28年度宇治市小中一貫教育に係る視察受入状況 <p>○平成28年度宇治市小中一貫教育についてのアンケート報告書</p> <p>○平成28年度宇治市小中一貫教育についてのアンケート報告書（概要版）</p>
<p>1 開会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・石田教育長 開会挨拶 ・小中一貫教育チーフコーディネーター紹介 <p>2 報告及び協議事項</p> <p>（1）報告1 平成28年度宇治市小中一貫教育の取組について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事務局より資料に沿って報告・説明 ・宇治ひろの学園より取組報告 ・木幡中学校ブロックより取組報告 ・宇治黄檗学園より取組報告 <p>（会長）</p> <p>事務局と3名のチーフコーディネーターから各ブロックの取組をご紹介いただいたが、各委員から質問やご意見はないか。</p> <p>（委員）</p> <p>報告の中にあつた「家庭学習」とは、どんな内容を指すのか。自宅で宿題以外の勉強をしている時間を意味しているのか、それとも、宿題等に費やす時間も含んでいるのか教えてほしい。また、中学生の「家庭学習」の時間は、各学年でどの程度なのか。</p> <p>子どもは勉強していると思っていても、親から見ると遊んでいると思えることもあるので、親からのアンケートと比較してみると、子どもとの「差」が出てくると思う。</p>	

(小中一貫教育チーフコーディネーター)

本校では、宿題以外の時間を指し、「学年×10分」程度を想定している。家でも、宿題以外で自分が興味あるものに取り組んでみてはどうかと、学年に応じた内容を例示している「家庭学習の手引き」を全学年に配布している。

25・26年度に宇治市の研究指定を受けて「家庭学習」に取り組んだ。その時、できるだけ早い段階から家庭学習への意識付けや習慣付けをしていこうと、各自に「自主学習ノート」を持たせて、宿題以外に時間があれば、自分が興味あることを1日何ページでもいいからやってみようと呼びかけた。「家庭学習の手引き」の中では時間も決まっているが、「自分の思った時間に、思ったことをやっけていこう」と。それが定着していけば、高学年になった時に自分が興味あること以外にも、苦手な教科の復習や宿題以外のテスト勉強等にもつながっていくことを期待した。

(小中一貫教育チーフコーディネーター)

本校では、場所が塾の自習室であっても、定期テストに向けての勉強をしたのであれば、それも家庭学習の時間として認めている。親御さんの目から見て、「うちの子そんな時間も勉強してませんよ。」ということがあっても、子どもたちが自己申告した時間を家庭学習の時間と認めている。

(会長)

「家庭学習」という言葉はとても不思議な言葉で、捉えようによっては、お家で自分の子どもにどんな教育を提供したいかという意味合いにもとれる言葉だ。例えば、ピアノを習わせたいとか、家で親子で習字を一緒にやりたいということがある意味「家庭学習」だが、ここでは議論の前提が「学校の補完」ということになっているので、テスト勉強とか予習・復習とかが出てくる。

小中一貫教育とは、「家庭・地域で子どもを育てる。」ということを実践視野に入れておくべきだが、学校は、学校のことで手一杯というのが現状だろう。

(委員)

私は、御蔵山小と笠取小・笠取第二小との小中連携の様子を参観した。全校で取り組んでいる大縄大会の中で、御蔵山小対笠取合同チームの形で対抗戦をしていた。教室の中で一緒に授業を受けるのもいいが、外で子どもたちが楽しみながら仲良くなっていく、それが中学校にもつながっていくというのがいいなと感じた。

(小中一貫教育チーフコーディネーター)

私も同じ場面を参観したが、体を動かしながらそれぞれの学校の仲間同士で打ち解け合っていくという場面だった。

(会長)

中学校の定期テストに向けて、その受け方を6年生に指導した資料があるが、問題に「ひらがなで書きなさい。」とあったら、「漢字で答えると×になる」とか、「記号で答えなさい。」とあったら、「言葉で答えると×になる」というのは、採点する側の都合であり、学力ではなく、テクニックの問題である。小中の違うカルチャーを持った教員同士が出会って議論にならないのか。

(委員)

私は、菟道第二小学校で行われた小中合同研修会と宇治黄檗学園の学園会選挙の2つを参観した。小中一貫教育を進める上で、小中学校の先生同士が交流することはとても大切だと思う。

宇治中ブロックの先生方もこの数年間交流してきたと思うが、小中学校の先生方同士でかなり遠慮がある印象を持った。宇治黄檗学園は広い職員室で、小中の先生方が多少別れていても一つの空間の中にいる。一つの空間にいるのと別の空間にいるのでは随分違いがあると思う。毎年人事異動で入れ替えがあると思うが、新しく入って来た先生は、宇治黄檗学園はこれまでの勤務してきた学校と違って小中教員同士の交流ができているなと感じると思う。どう違うのか、その違いがどこから来ているのかを分析して他のブロックに伝えていくと、他のブロックももう少しうまく交流できるのではないかと思うんだが。

(小中一貫教育チーフコーディネーター)

やはりはじめは違和感があったし、感じるところが違うと思うことが確かにあった。しかし、いつも同じ空間にいるということが一番大きいと思う。宇治黄檗学園では、教科部会をはじめ1～9年までのメンバーが揃う会議がいくつかあり、細かい部分までの話をする。職員室の中央にもリースペースがあって、小学校の教師同士がするような話を中学校の教師ともする。持ち上がった話の話をするとか、自分の教え子が中学校の部活で頑張っている様子を応援した後で、いろんな話をするとか、改まった感じではなく日々できることが大きい。

改まった場だと、授業参観してもなかなか研究協議が深まらなかったり、何となく遠慮して感想しか言えなかったりする。そこで今年度は、「授業を観る視点」を明確にした。「いろんな発達段階に応じて教師とのやりとりの場を設定できているか」を、観て来てくださいというように。柱がしっかりしていると意見を出しやすいし話しやすい。日常的な交流としっかりと柱を持った交流とを設定していくことが大切だと思う。

(委員)

一緒に空間にいることのメリットは分かったが、立地が別の学校にとって交流することは地理的な問題以外にも難しいものがあるのか。やはり、ぱっと行って、ちょっと相談というのは難しいのか。

(小中一貫教育チーフコーディネーター)

私もチーフになって3年になるが、顔馴染みが行くと随分違う。新しく異動してきた教師や面識があまりない教師にはやはり遠慮が入る。また若い教師は年配の教師に意見が言いづらい面もある。宇治黄檗学園のようにフロアが一緒だと日常会話ができるので、やはり違うと思う。

(委員)

宇治黄檗学園では、職員会議を小中合同で行っているのだから、みんなの前で提案したり、意見を言ったりしてその人となりが見える。前期(1～4年)は別棟だが、中期(5～7年)と後期(8・9年)は同じ校舎の2階3階にいる。教室に行く時も階段を一緒に上がるし、どこでも顔を合わせる。何より人事交流によって、この5年間で小学校籍の教員が4人中学校に転籍し、中学校籍が1人小学校へ転籍した。学園内で交流していることも大きいと思う。教職員の親睦を図る行事も80人程で一緒にしている。

(委員)

本校の場合は施設分離型だが、「A君は今どんな様子か」という視点を当てると、今までよそよそしかった小中の先生方が話にスムーズに入れる。視点が大きくなると難しいが、子どもの具体的な話や1つの視点を当てて明確にすると、小中間の溝が収まる感じがする。

(2) 報告2 平成28年度宇治市小中一貫教育についてのアンケート結果について(報告)
「アンケート報告書・概要版」に沿って事務局より説明

(会長)

資料が膨大で大変だが、質問等ないか。

改訂の提案もあると聞いているので、その時に今回の結果についても協議いただきたい。

(3) 報告3 平成28年度宇治市小中一貫教育推進協議会の活動について(報告)
資料14頁に沿って事務局より説明

(会長)

14頁の(2)について、各委員に訪問いただいているので、その視察の結果や感想等を含めて伺いたい。

(委員)

昨年は榎島中ブロック、今年は北宇治中ブロックと、どちらも分散進学の学校を視察した。当日は、まず中学校の授業を参観し、その後の研究会にも参加させていただいた。小学校と中学校の先生方がどのような形で意見交換されているのかということを中心に参加した。

今回の視察の趣旨である小中一貫教育に関する学習指導案を作成された研究会だったが、学習の指導方法に関する協議が多く、小中一貫教育に関する意見、「目標はどこにあるのか」という意見交換は薄かったという印象を持った。

研究会終了後、校長室で小中学校の校長先生方とお話しさせていただいたが、校長先生方には地域特性を含めて各小学校のすごく細かいところまで理解していただいていた。「分散進学」であるからこそ、そこに意識を持って見ていただいていると感じた。学校としては「分散」に対する理解が十分に進んでおり、後はそれぞれ担当の先生方に一層の意識付けをお願いしたい。昨年、榎島中ブロックを視察した時にも充分理解していただいていると感じたし、小中一貫教育の取組を引き続きその方向で進めていただきたいと思った。

(委員)

小中一貫教育が全面実施されて以降、施設一体型としては「宇治黄檗学園」、施設分離型としては「宇治ひろの学園」と、それぞれのモデル校として比較・対比されることが多かったが、初めて宇治ひろの学園を訪問した。当日は、2つの小学校がそれぞれの校外学習についての発表をして交流を図ることがねらいだったようだが、その発表の中身に少しズレがあったことが気になった。これが、時間的・空間的な部分での先生方のご苦勞の有り様なのかと感じた。常々近くにおいて、摺り合わせや話し合う機会があればこうした発表の内容にズレは生じず、ご苦勞はなかったと思う。

今年度5年目が終了しようとしているが、小中一貫教育の形態としての「施設一体型」「分離型」「分散進学を抱える分離型」の、どこがよくて、どこがしんどいのが概ね見えてきたと思う。それを解消する手立てに次年度以降取り組んでいただけると嬉しく思う。分離型の学校の先生方は、熱意を持って取り組んでいるが、それではカバーしきれない時間的・空間的な制約があると思う。更に人を投入してカバーするとか、一体型をもう1つ2つ造っていただくとか、そういう方向性では是非進んでいただけると嬉しいと感じた。

もう1つは、この5年間は手探りで積み上げ積み上げしてきたと思う。木幡中ブロックからは、色々見直して「スリム化」という言葉も出ていた。よりよい結果を求めて「たし算」ばかりではない取組、「ひき算」の取組もしているという点に、前向きに検討いただいていることをありがたく感じた。

(委員)

私は、南宇治中ブロックの小学6年生への児童生徒理解の取組を見せていただいた。中国からの帰国子女が小学校へ入って来た時、言葉が通じないところから取組を始めている。その子たちにかに馴染んでもらい、どうやって勉強に向かえるようにしていくか。先生方の中にも専門的に中国語を話せる人もいれば、対応できる人もいるが、しっかりやらねばという懸命な姿勢を感じた。

また、南宇治中学校の中国武術の演武を小学生に見せていた。話を聞くと、以前は中国からの帰国子女が中心になっていたらしい。現在では、10数人くらいの部員の中で1割程度しか帰国子女はいないらしい。この流れを作ったのは、小学校時代からこうした演武を見て、自分もやってみたいという子どもたちを育てたということ。

これまで木幡中ブロックも見せていただいたが、その地域毎の特性が現れた取組を見せていただいた。その部分での先生方の対応に大変なご苦勞があると感じた。

(委員)

西宇治中学校ブロックを視察した。西宇治中に100名以上の教員が集まる大所帯での研究会がスムーズに運営されていることに、何年も積み上げてきたノウハウが定着してきていると感じた。

中学校の授業を小学校の教員が参観する研究会だった。その事後研究会で、若い中学校の先生の授業を、小学校のベテラン教員がいろいろ指摘して終わったことが残念だった。そういう研究会ではなく、例えば小学校の体育の授業を中学校の体育専門の先生と一緒に創っていくような、中学校教員の専門性が活かされるような授業研究の方が実り多いものになると思った。

それでも、最初は顔も分からなかった小中の教員が、5年経ってここまで来たなと思う。毎年同じことの繰り返しだとか、マンネリ化とか言われるかもしれないが、中1ギャップはなくなってきているし、小小連携は進んでいるし、定期テストのことも含めて小中一貫教育の取組は進んでいると思っている。後は、各ブロックとも取組が飽和状態であることが課題だ。これは全て小中学校の「プラス1」の仕事になっている。「プラス1」の仕事をしているにもかかわらず、人は十分に配置されない。みんなのエネルギーで何とか進めている状態である。だから、整理すべきは整理して、スクラップすべきはスクラップして、それぞれのブロックの特色が出るような取組に今後はシフトしていったらいいと思う。

人事異動の時期に来ているが、あのブロックの学校へ替わりたいたか、あのブロックでこういう実践がしたいとか、そういう所まで教員の意識が高まればいいなと思っている。小中が研究に必死で取り組もうと思うなら、ブロックで研究指定を取るのが一番だ。本校も文部科学省の研究指定を取って初めて、去年くらいから小中と一緒に必死になって研究発表会に向けての取組を進められたと思う。それが、一貫校の特色だと思う。

(会長)

来年度の各ブロックの取組にも関わるが、取組内容がいわゆる「総花」になるのは否めない。プラスαで仕事していただいているので、人も付けて予算も潤沢だったら良いが、どこも厳しいのが一般的な状況なので、うちのブロックは特にここに焦点を当ててこの数年は取り組むというのも特色であり特化だと思う。実際、物理的な限界は少なからずあると思うので、来年度に向けてのところで論議したいと思う。

(委員)

宇治黄檗学園の学園会選挙を参観した。小学校では最近児童会の役員を選ぶ時も選挙をしなくなった。クラスの委員会の一つとして、クラスの代表として選ばれてくる。だから、子どもたちは中学校へ行って生徒会選挙があるまでは選挙を経験しない。そうすると、選挙で人を選ばないので、自分が学校全体の運営に関わらないという形になっている。

一体型の宇治黄檗学園では、学園会の立候補者が上手に演説をするが、それを5・6年生が聞いている。そこに参加することが、自分が学園の一員であることを自覚するし、立派に発表している先輩を見て、自分たちも中学生になったらこういう形で学園を引っ張っていくんだとイメージを持つ。一貫校だからこそできるいい取組だなと思った。また、投票箱も本物を選挙管理委員会から借りてきて使用している点も、主権者教育の観点からもいいなと思った。

(委員)

宇治中ブロックの小中合同研修会を視察した。ブロックによって様子は違うと思うが、菟道第二小学校へ行った時には、菟道小・菟道第二小・宇治中がまだまだ遠慮し合っているなと感じた。

研修会の前提となる資料の内容も、準備の段階から学校によって全然違っていた。はじめにこういうものを準備しようという確認があるべきと思う。そこから交流が進んでいくと思う。

それぞれの学校に特色があって、いい面もたくさんあると思うが、問題点を洗い出さなくてはいけないということかもしれないが、それぞれの学校の課題が紹介されていた。それも大切だと思うが、うちの学校はこういう点が特徴でいい所なんだ、他の学校でも一緒に取り組まないかという交流を進めてほしい。小小連携では少ししているようだが、中学校も含めてやっていくと、子どもたちが抵抗なく小学校から中学校へ行ける気がした。

(欠席委員からの感想を事務局代読)

昨年秋、三室戸小学校で行われた東宇治中ブロックの合同研修会を視察した。落ち着いた子どもたちの様子や先生方の研究会への熱心な取組の様子を見ると、大規模校とは異なり、こじんまりとしたアットホームな感じの中にしっかりとした教育がなされている印象を受け、懐かしさとともにホッとした気分になった。校長先生方との意見交換の場では、素朴な疑問にも回答いただき、短い時間ではあったが充実した視察ができた。

(会長)

視察に行かれた方にはみんな発言いただいたが、全般に関わってご意見があれば伺いたい。

(委員)

先程から施設一体型とか分離型とか地理的な部分の問題が出ているが、最近はインターネット等で距離が縮まっているという話がある。学校で顔を合わせて話をするのも大切とは思いますが、それだけにこだわらずちょっとしたことを話す時にインターネットを使うというのは難しいのか。

(委員)

宇治市ではサイボウズを取り入れていただいている。チーフコーディネーターの役に就いたこともあるが、いろんな先生方とメールのやりとりをすることがかなり増えた。それで会議とまではいかないが。

(委員)

チーフコーディネーター3年目になるが、サイボウズでやりとりすることが増えた。今までだったら足を運んでいたことも、データだけだったら3校の校長先生方にも同時に送ることができるし、見ていただいて回答をいただくことが増えた。そういう意味では時間的にはありがたい。反面、自分が出なくなったことは反省点としてある。学校へ出かけて顔を見せることも大事なことで最近感じている。そのあたりをうまく使っていく必要がある。

(会長)

事務的なことや情報の共有であればサイボウズも有力だが、お互いに顔を見合わせて「そうだなあ」という情緒的な所もあるので、二刀流というか両方使いながらということも大事だと思う。課題の一つを伺えた。

(4) 報告4 平成29年度小中一貫教育の取組について

① ラーニングコーディネーターについての説明

② 小中一貫教育アンケートの改訂について説明

双方とも案の段階であり、協議会終了後に関係資料を回収

(会長)

ラーニングコーディネーターの配置の件とアンケートの改訂案ということでしたが、まだ案の段階ではありますがご意見があれば伺いたい。

(委員)

従来のコーディネーターの先生がいて、更にラーニングコーディネーターが配置されると理解すればいいのか。

(事務局)

いいえ。残念ながら違います。

(委員)

ラーニングコーディネーターについては宇治黄檗学園から配置していくということでいいか。その後、分散無しの分離校への配置と分散ありの分離校への配置を分けて行う理由は何か。

(事務局)

まず宇治黄檗学園でお取組いただき、その成果を分散進学のないブロックで広めていただき、更にそこへ、精選・検討等を加えて分散進学のブロックへと考えている。

(委員)

ということは、先行して宇治黄檗学園へ配置されるが、他のブロックには従来のコーディネーターの先生方に仕事していただけると理解していいのか。

(事務局)

チーフコーディネーターは9ブロックに残っていただく形になる。

(会長)

来年度に改めて提案があると思うが、以上をもって来年度の案として伺ったということにしたい。

各委員から視察の報告やご見識を伺って、施設一体型とそうでない空間的な条件の違うブロックとの違いをある程度踏まえて論議しなくてはいけないと思った。また、小中一貫教育の議論・交流をしていく中で、「今まで実施してきたこの取組は、今後も必要なのか」とか、今日「スクラップ」という業務量に対する意見もあったが、「やめてもいいのでは」とか、「もっと違うことを考えてもいいのでは」という視点も必要だと思う。

市内全10ブロックあるが、やはり地域事情がかなり異なるので、それぞれの状況に応じた特色・特徴を出してもいいと思う。学校の取組としても「総花」になりやすいし、そうすることを求められるが、「できないことはできない。」「難しい。」との判断も必要だと思う。

教育委員会と学校管理職で折衝して折り合いが付けられれば、少し学校の責任も軽くなるかもしれないという感想をもった。

以上で、第2回推進協議会を終える。

3 閉会

澤畑部長より閉会の挨拶